
即席勇者！

moon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

即席勇者！

【Nコード】

N6287N

【作者名】

moon

【あらすじ】

普通の兵士として普通に働いていた主人公。
王国代表の勇者が倒されたせいで、なんと勇者にされてしまった！？
と言った感じのファンタジー小説。

プロローグ く勇者誕生、いきなりピンチ？

『勇者』、と聞きどんな人物像を想像するだろうか？
やさしい者、強い者、慈悲の心を持つ者…

そう、『勇者』とは万人の心に光を照らす存在である。

そして、この大陸にも『勇者』は存在していた。

王国暦600年。この大陸はある大きな問題を抱えていた。

1000年前に封印されたと言われている魔物の王、所謂魔王が大陸の北に復活。

魔物による帝国を創る為に立ち上がったのである。

しかし、大陸の人々も何もしなかったわけでは無かった。

大陸の一番北の町、ノーザストから、青年がたった一人で魔王に立ち向かったのである。

魔王を倒す事ができると言われる剣、『光の絶対剣』を振りかざしながら…

だが、一ヶ月たっても、魔王軍はその侵攻を止めなかった。

そして、ノーザストには未だ、青年は帰らぬままであった…

そのころ、大陸の一番南の町、ビギンスタでは魔王の噂を耳に挟む事はあっても、

普段と変わらない生活を送っていた。

「おい、起きろ！」

部屋の中に響く声。ここは、ビギンスタの城の中の待機室。

鎧を身に着けた兵士、マイクがベットで寝ている男を起こしていた。

「なんだよ、もう少し寝かせるよ……」

兜をアイマスク代わりにして寝ている男が、寝返りをうちながら答えた。

カラン、と音を立てて兜が床に落ちた。

「起きろっつてんだろーが！」

いつまで経っても起きない男にマイクは、力づくで起こすことにした。

「うわ!？」

ドン、という音と共に男は目を覚ました。

男の目の前には、先ほど寝返りをうつた時に落ちた兜がある。

「いたた…なにすんだよ」

兜を頭に乗せて、男は立ち上がった、友人に殴られた頬を擦りながら。

すでに眠気は吹っ飛び、完全に目が覚めている。

「今日は、王様に呼ばれてるんだろ?」

腕組みをしてマイクが言った、その表情はあきれ半分、関心半分とあった所である。

王に呼ばれているというのに、男は余裕の寝坊ぶりであった。

「…あ！忘れてた」

余裕があるのも納得、男はそれを完全に忘れていた。久しぶりの任務、マイクと一緒になら楽しいかもな、と男は思った。

「俺も王様に呼ばれてるんだ、合同任務ならいいな」

マイクは腕組みをとき、槍を背中に携行しながら笑顔で言った。どうやら、友人と同じことを考えていたようだ。

ここまでは、日常と変わらない会話だった。城に使えている兵士の何気ない会話。

「噂のやつかも知れないな、まあ、まさかそれは無いと思うが」

しかし、やはり人々の心の中には、確実に変化があった。

「魔王、だろ？相当やばいやつらしいな…おっと、じゃ俺は先に行くぜ」

魔王、と言う絶対的な恐怖の存在が。それは、マイクもその友人も薄々気づいてはいた。

「ああ、着替えたらすぐ行くよ」

部屋を出て行くマイクに、男も笑顔で答えた。まだヒリヒリする頬を押さえながら。

さて、なぜマイクの名前はすぐに言ったのに、この男の名前は言わ

ないかというと、

この男は名前がコンプレックスなのだ。だから、本人が名乗るまでは言わない事にした。

と言うわけなので、余り気にしないで頂きたい。

着替え終わった男は、早速、王との謁見の間へと急いだ。

謁見の間は、城の三階にある。一階の待機室から、重い鎧を着ながら階段を上るのは大変だ。

見回りで慣れているはずだが、朝という事と、慌てて着なくてもいい戦闘用の鎧を纏っているのが原因だった。

「しつれいしまーす！」

やっとの思いで謁見の間にたどり着くと、扉を勢いよくあけ、男は中に入った。

いきなりの事で、王様も口を開けっ放しになっていた。

「よ、ようやくついたか、マイクは当に着いていたぞ」

数秒間、ポカンとしていた王様だったが、ハッと我に返ると、あきれた顔でそう言った。

が、男の方は相変わらずで、悪びれない様子だった。

「いやあ、こんな時にかかわらず寝坊してしまいました」

男は素直に、本当に素直に遅刻の理由を言った、笑いながら。

普通の王なら、ここは怒鳴る所だろうが、ビギンスタの王は、この男の性格をよく把握していた。

「寝坊だと？うむ、それは…」

どうにかならんのか、と続けたかったが、この男にどうにかなるはずも無い。

それがわかってしまった王は、フツとため息をつく、それ以上は続けなかった。

「それより、マイクはどこです？」

が、男の方はそれを気にせず、友人の姿を探している。

王は再び、今度はハア、と大きくため息をついた。

「少しは反省してほしい所だが、まあいい、話を聞いてくれ」

男が、話とは？

と、聞こうとした時にはもう王は話を始めていた。

このままでは話が進まない、そう思った王は男を無視して話を始めたのだった。

「さて、君も知っているだろうが、魔王の話だ」

余りに唐突な話、男は驚いた。

そして、さつきとは打って変わり、まじめな顔つきになると王の話を黙って聞き始めた。

「今の所、魔王軍は『勇者』達により、

その戦力を消耗し、彼等の拠点である魔王城に籠っている、しかし…」

王は困り果てた表情になると、その先を続けた。

「とうとう、我が国からも『アレックス計画』の戦力を出さねばならなくなつた」

『アレックス計画』、それはノーザストの勇者の名前がつけられた、大陸一の王国、グレートキングダムの打ち出した計画であつた。

王様は、しばらく口を閉じていたが、やがて口を開け、男に向かい言った。

「君に『勇者』になつてもらふ事になつた」

『アレックス計画』とは、大国が打ち出したにしては余りにも馬鹿げた計画であつた。

ノーザストの勇者が負けたのは、『光の絶対剣』を上手く操れなかつたからだ。

そう考えたグレートキングダムはこの計画を考え出した。

『勇者』と呼ばれる、10代から20代までの男女に、わずかな資金援助と武装支援で、魔王を倒して貰う。

それが、この計画の全貌だつた。そして、大陸一の大国に逆らえない国々は、次々と若者を旅に出したのだった。

そして、今ここでビギンスタの王から男に告げられたのは、まさに死刑宣告にも近いそれだったのである。

「俺が、『勇者』に？」

それにも関わらず、男は冷静だつた。

そう、王がこの頼りない男を選んだ理由、一つはこの芯の太さ…
というか、図太さであつた。

「うむ、さらに『アレックス計画』に基づき、後2人、時間差で魔

王城に向かってもらおう」

馬鹿げている、とはわかっているけど、やはりビギンスタは小国、逆らえない。

王は目を閉じ、頭を下げた。

「魔王を倒せばいいんですよね、任せてくださいー！」

しかし、男はやる気に満ち溢れていた。

そして、王に会釈すると、すぐにでも部屋を出て行こうと振り返った。

「待て！」

男は王に止められ、再び王の方を向いた。

「私もそこまで残酷ではない、君にお供をつけてやろう。一人ではつらいだろうからな」

王も、何か自分にできる事はないか、考えたに違いない。

お供をつける、と言うのは計画には反した行為だが、王にはこれぐらいしか手助けできないのだろう。

「お供ですか、ありがとうございます」

旅にお供がいれば、少なくとも寂しくは感じないだろう。

男は、またさわやかな笑顔を王に見せた。

「さらに、宝物庫の宝箱を三つやる、まあ、こっちは『アレックス計画』の通りだが」

王が言っている間、男は辺りを見回していた。この部屋に入った時と同じく、人影を探している。

「あの、お供の人はどちらに？」

王はふむ、と一呼吸おいてから、玉座の後ろの空間を指差した。男が見てみると、なにやら赤いカーテンが3つあり、なぜかそこにスポットライトが当てられている。

さらに、カーテンの上には『1』『2』『3』と書かれたプレートがかけてあった。

「さあ、好きなカーテンを選ぶがよい」

王が余りにもまじめに言うので、男は吹き出してしまった。が、王はどうやら、一応まじめなつもりだったらしく、眉間にシワを寄せている。

「じ、じゃあ、三番、で…」

笑いをこらえつつ男は三番のカーテンを指差した。

スポットライトが当たってはいるが、中にいる人の姿は確認できない。

「三番、だな…？」

椅子に腰掛けながらも、前のめりでこちらを睨む王。

さらに、どこからともなくスネアドラムのタカカタカカ…と、という音まで聞こえてくる。

「あっはっはっ！」

とうとう我慢できずに、男は笑い出してしまった。と、それと同時に、カーテンもめくれ、中にいた人物がでてきた。

彼女は、失礼します、と断ってから王の横を通り、男の元へと向かった。

「あの、大丈夫ですか？」

男が顔を上げると、そこには女の子が立っていた。

年齢は15か6くらい。茶色く長い後ろ髪を腰の所まで伸ばしている。

男の背が高いせいか、男の胸くらいまでの身長しかない。

「ああ、だ、大丈夫、よろしく、えっと…」

男がそこで詰まったので、どうしたのかと首をかしげていた女の子だったが、

どうやら男は自分の名前がわからずにいるようだと言ったのか、

「ハーナです、よろしく！」

ハーナは、手を大げさに広げて名前を名乗ると、次に前で組み、お辞儀をした。

男は、動揺した。今、あつたばかりの女の子がここまで礼儀正しく挨拶したのだ、

こちらも名乗らなければいけない。そう思ったのであった。

「よろしく、俺の名は…」

緊張の一瞬。とうとう男の名前が明らかになる。

というか、開始からずっと引っ張ってきたが、やはり『男』という呼称のままでは説明しづらい。

こちらとしてはさっさと名乗ってほしかったくらいである。

男は、一呼吸置いてから、叫ぶくらいの勢いで名乗った。

「…アエイオだ！」

王様が吹き出す音が聞こえたが、彼は別に気にしなかった。なれていたので。

こうして、ビギンスタの勇者アエイオとそのおともハーナの冒険が始まった。

アエイオとハーナは謁見の間を後にした。旅の準備として、宝物庫の宝箱を貰いに行くために。

『アレックス計画』の一環で、アエイオは鎧から普段着に着替えさせられていた。

地下一階の宝物庫へ向かう事にはなったが、今度は階段が苦にはならなかった。

「ここが、宝物庫ですね」

宝物庫の前には、見張りはいなかった。

アエイオはどうしようか迷っていたが、ハーナが先に扉を開けてしまった。

「おい、勝手にあけていいのかよ？」

アエイオはハーナに声をかけたが、笑顔のまま振り向くハーナを見て、仕方が無い、と思った。
結論からすると、ハーナのこの行動は正解。宝物庫の中には兵士がいた。

重そうな鉄の扉が奥に3つ程見える。石壁の宝物庫の中は、まるで牢屋のようだった。

アエイオが入ってきた扉を閉めようとする、兵士が止めに入った。

「待て、閉めるな！」

しかし、兵士がそれを言い終わる前に、アエイオは扉を閉めた。

それを見た兵士は今度はうなだれ、手で頭を押さえて泣き出してしまった。

そして、二人の方を見てから、スツと扉の方を指差した。

「あ、取っ手が取れてますね」

ハーナがそれに気がついたのは、すぐの事であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6287n/>

即席勇者！

2010年10月9日02時51分発行